



佐藤親賢

Chikamasa Sato

プーチンとG8の終焉

岩波新書

1594

B312.38  
6

*Furis*



*Natus*



*Horeas*



*Zephyrus*



佐藤親賢  
Chikamasa Sato

# プーチンとG8の終焉

クリミア編入後に、約二〇年関与してきた「G8」の枠組みと決別したロシア。経済的苦境に直面し、ナシヨナリズムと軍事力に訴える大国の動向は、混乱する中東情勢にも関わり、国際秩序の動揺を加速しかねない。著者自身の長期取材をもとに、ウクライナ危機の推移を追うことで、プーチン大統領が展開する政策の本質に迫る。

岩波新書  
1594



佐藤親賢

1964年埼玉県生まれ。東京都立大学法学部卒業。  
1987年共同通信社入社。1996～97年モスクワ  
大学留学。東京本社社会部、外信部を経て  
2002～03年ブノンペン支局長。同年  
12月～07年2月モスクワ支局長。08年  
9月～12年12月モスクワ支局長。現在、  
編集局外信部次長。  
著書「プーチンの思考——「強いロシア」への選  
択」(岩波書店)

プーチンとG8の終焉

岩波新書(新赤版)1594

2016年3月18日 第1刷発行

著者 佐藤親賢

発行者 岡本厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

<http://www.iwanami.co.jp/>

新書編集部 03-5210-4054

<http://www.iwanamishinsho.com/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© Chikamasa Sato 2016

ISBN 978-4-00-431594-0

Printed in Japan

「ロシアとプーチン政権の歩み」関連略年表

1991. 8. ソ連共産党保守派のクーデター未遂事件  
8.24 ウクライナがソ連からの独立を宣言  
12. ゴルバチョフ大統領が辞任。ソ連消滅
- 1993.10. エリツィン大統領が反対派の牙城だった最高会議  
を武力制圧し廃止  
12. 大統領権限を強化する新憲法採択
1994. 7. ナポリでの先進国首脳会議(G7 サミット)政治討議  
にロシアが参加
1996. 7. 3 エリツィン大統領再選
1997. 6. 米国でデンバー・サミット、ロシアが主要国(G8)  
首脳会議の正式メンバーに
1998. 8. ロシア金融危機発生
1999. 8. エリツィン大統領がプーチン連邦保安局長官を首相  
に任命  
9. モスクワで爆弾テロ相次ぎ死傷者多数。ロシア軍  
がチェチェン共和国に進攻し本格的な武装勢力掃  
討作戦開始  
12.31 エリツィン大統領電撃辞任、プーチン首相が大統  
領代行兼任
2000. 3.26 プーチンがロシア大統領に初当選  
5. 7 プーチン大統領就任
- 2002.10. モスクワ劇場占拠事件。約130人が犠牲に
2004. 3.14 プーチン大統領再選  
9. ロシア・北オセチア共和国ベスランで学校人質事  
件、約330人が犠牲に  
11.～12. ウクライナで「オレンジ革命」。親欧米政権誕生が  
確定
2006. 7. ロシアがサンクトペテルブルクでG8首脳会議初  
開催

「ロシアとプーチン政権の歩み」関連略年表

- 2007.12. プーチン大統領がメドベージェフ第1副首相を後継指名
2008. 3. 2 メドベージェフが大統領当選
5. メドベージェフ大統領就任、プーチンが首相に
8. 南オセチアをめぐりロシアとグルジアが軍事衝突
2011. 9. メドベージェフ大統領が再選断念を表明
2012. 3. 4 プーチンが3度目の大統領当選
2014. 2. 南部ソチでロシア初の冬季五輪開催
- 2.18~20 ウクライナ・キエフの独立広場でデモ隊と治安部隊が大規模衝突し、3日間で100人以上が死亡
3. ロシアがウクライナのクリミア半島を編入、G7がロシアをG8会合から排除すると決定
4. ウクライナ東部の親ロシア派が「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」樹立を宣言、ウクライナ政府軍と戦闘に
- 7.17 ウクライナ東部の親ロシア派支配地域でマレーシア航空機撃墜
9. 5 ロシア、ウクライナ、ドイツ、フランスの首脳がベラルーシのミンスクでウクライナ和平を協議、「ミンスク合意」採択
2015. 2.12 ミンスクで4カ国首脳が再会談、「ミンスク合意」の履行で一致
- 9.28 プーチン大統領が国連総会で反「イスラム国」大連合を提唱
- 9.30 ロシアがシリアで空爆開始
- 10.31 エジプト・シナイ半島でロシア旅客機が「イスラム国」の爆破テロで墜落、224人が死亡

主要参考文献

- 「プーチン、自らを語る」N・ゲヴォルクヤンほか著(高橋則明訳)、扶桑社、2000年
- 「物語 ウクライナの歴史」黒川祐次著、中公新書、2002年
- 「クリミア戦争」(上・下)オーランド・ファイジズ著(染谷徹訳)、白水社、2015年
- 「[新版]ロシアを知る事典」川端香男里ほか監修、平凡社、2004年
- 「ロシア・ソビエトハンドブック」東郷正延ほか編、三省堂、1978年
- 「クレムリンの5000日」エウゲニー・プリマコフ著(鈴木康雄訳)、NTT出版、2002年
- 「プーチンはアジアをめざす」下斗米伸夫著、NHK出版新書、2014年
- 「世界年鑑」共同通信社
- «От первого лица. Разговоры с Владимиром Путиным», Н. Геворкян, А. Колесников, Н. Тимакова, ВАГРИУС, 2000 г.
- «О сопротивлении злу силою», И. А. Ильин, Айрис пресс, 2005 г.
- «Первый украинский», А. Колесников, ВАГРИУС, 2005 г.
- «Оранжевая принцесса», Д. Попов, И. Мильштейн, Издательство Ольги Морозовой, 2006 г.

おわりに

ロシア第二の都市サンクトペテルブルクのセラフィモフスコエ墓地を訪れたのは二〇一二年二月の雪の日だった。広い墓地の奥まったあたりに「主よ、御心が行われますように」と刻まれた、人の背丈ほどの黒い十字架が立っている。プーチン大統領の両親の墓だ。

プーチンの母マリヤは一九九八年七月に、父ウラジーミルは翌九九年八月に亡くなった。プーチンは二人の間の唯一成人した子供だった。夫妻は大戦をかるうじて生き延びて戦後に三人目の子供をもうけ、息子が大統領になることを知らずに他界した。

父が亡くなった際、当時のエリツィン大統領から首相に任命されたばかりのプーチンは墓前で「ソ連の復活」を誓ったといわれる。墓碑に刻まれた祈りの言葉は、熱心な共産党員だった父に隠れて幼い息子に洗礼を受けさせた母親譲りの信仰心の現れだろう。ソ連の崩壊を招いた共産党のイデオロギーを忌み嫌い、米国と対峙した「超大国」ソ連に郷愁を抱く一方、ソ連時代には否定されていたキリスト教信仰を隠そうとしない――。両親の墓は、プーチンという人





サンクトペテルブルクにあるプーチンの両親の墓(著者撮影)

の複雑な内面を表しているように思える。

プーチンはナチス・ドイツとの死闘に勝利したことを祝う戦勝七〇周年記念式典が行われた二〇一五年五月九日、クレムリン脇の「赤の広場」で恒例の軍事パレードの後に行われた市民の遊行に、水兵の制服を着た父の遺影を持つて参加した。

クリミア編入で国際的非難を浴びる中で迎えた、第二次世界大戦の勝利から七〇年を記念する特別な日に、大戦に参加した親族の写真を掲げて赤の広場を行進しようというこの企画「不滅の連隊」には、当局の予想をはるかに上回る約五〇万人の市民が参加し、地下鉄ベロルスカヤ駅と広場をつなぐトベルスカヤ通りの約四キロは数時間にわたって川のように流れる人の波で埋め尽くされた。背広姿で行進の先頭に立ったプーチンはテレビの取材に「戦争に参加した人々はみな、復員して赤の広場を歩くことを夢見ていたが、かなわなかった。きょうは父の写真と一緒に行進できて幸せだ」と話した。

重傷を負いながらも生き延びたプーチンの父と違い、行進に参加した人々が遺影を掲げた兵士の大半は、突然侵攻してきたドイツ軍から祖国を守るために戦地に赴き、二度と戻らなかつた。首都での異例の遊行進を国民の団結を狙った官製デモと見ることもできるが、当局の動員だけではこれほどの人数が参加することはなかっただろう。当時のソ連で七人に一人が犠牲になったともいわれる大戦の惨禍は、ロシアの人々の心に決して忘れることのできない「民族の記憶」として深く刻まれている。

こうして大衆の中にいる時、プーチンは普段より生き生きとしているようにみえる。九〇%に近い驚異的な支持率の背景には、政治的安定や経済成長などの実績のほかに、プーチンが「国民との対話」に長じ、人々が何を欲しているかを敏感に感じ取っていることがある。ロシアの政財界を牛耳っていた新興財閥の排除、徹底したテロ対策、ロシア愛国主義の鼓舞、民主主義や人権問題で対口批判を繰り返す米国への厳しい対応などがそうだ。クリミア編入もその一つといえよう。欧米の非難や重い経済的代償を覚悟の上で、プーチンは密かにロシア軍部隊を派遣して実効支配を固め、ロシア人が「父祖伝来の土地」と考えるクリミア半島を「取り戻し」た。たとえ大きな困難があろうとも国民はこの決断を支持してくれるという確信があったからだ。



そういう意味で、プーチンはいわゆる「独裁者」ではない。内政外交の決定には指導者自身の気まぐれや、プーチンの個人的利益を優先したものは見当たらず、常に国民の目や世論調査の支持率を気にしながら慎重に政策判断を行っている。

一方、ロシアを取り巻く国際的環境は年々厳しさを増している。北大西洋条約機構(NATO)は東方拡大を続け、旧ソ連圏のグルジアやウクライナの将来の加盟もあり得ない状況ではなくなった。クリミア編入でロシアは経済制裁を科され軍事的脅威は増大しているが、主要輸出品である原油の国際価格下落のため経済成長は見込めなくなり、軍備増強につき込める予算は限られている。財政赤字の補填のために年金支給年齢の引き上げが議論されているが、生活に直結する不人気な決定を国民が受け入れるかどうかわからない。

ロシアはウクライナ危機とシリア空爆で、ソ連崩壊の遠因になったといわれるアフガニスタン侵攻の失敗以来封印してきた国外での本格的な軍事作戦を「解禁」した。シリア空爆開始後の二〇一五年一〇月二二日、プーチンは恒例の「ワルダイ会議」の講演でトルストイの長編小説『戦争と平和』の一節を引きながら「平和は人類の理想ではあるが、積もり積もった対立の解消はしばしば戦争を通じて追求された。戦争は新たな戦後秩序を構築した」「現実を見つめようではないか。軍事力は今後も長い間、国際政治の道具として使われ続けるだろう」と述べた。ウクライナ危機後、プーチンは国益を守るためには国外への派兵と武力の行使も辞さないという姿勢をはつきりと見せ始めた。

半面、ロシアはアフガニスタン、イラクでの戦争からなかなか手を引けず苦しんだ米国と同様、出口戦略の策定を迫られる立場になった。特にウクライナ東部紛争への関与をいかに終わらせてウクライナとの正常な関係を取り戻すかは、ウクライナがロシアにとってほとんど一体とみてよいほどの深い歴史的、経済的、民族的絆を持つ国であるだけに、今後のロシアの命運を左右する重大さを帯びている。また、世界最大の軍事大国である米国との早期の関係正常化なしにロシアの安全保障の確保が困難であることはいままでもないが、当面はその見通しが立たない。

留学時代を含めて通算八年半に及ぶモスクワ生活で筆者が感じた印象は、ロシア人は「変化を恐れる国民」だということだった。生活習慣、言葉、仕事に対する態度など、ロシア人は伝統的なもの、古いスタイルを大切にしている。決められたルールをなかなか変えたりしない。外国からの侵略、戦争、社会主義革命など動乱の歴史を経験したせいなのか、特に政治に関しては、変化は「今よりよくなる」のではなく「もっと悪くなる」というのがロシア人一般のとらえ方であろう。四一八年に一度、大統領が代わるごとに政権や省庁の幹部が大幅に入れ替わる米国な





どと違い、平穏な生活が維持されるならソ連でもプーチンでも構わない、といった「超」安定志向がロシア人にはある。変革を求める野党は常に少数派だ。

しかし二〇〇〇年に四七歳の若さでロシア大統領に就任したプーチンも、次期大統領選が行われる二〇一八年には六〇代の半ばを迎え、その統治は通算一八年に及ぶ。そうなれば「プーチンはいつまでロシア国民の支持を維持できるのか」ではなく、「ロシア国民はいつまでプーチンに頼り続けることができるのか」が問題になってくるだろう。国家のリーダーを国民の投票で選ぶ民主主義という制度は短期的に見れば非効率かもしれないが、候補者が政策で競い合う真の政治的競争なしに政権を継続させていけば、いつかやつてくる指導者の交代を円滑に、平和裏に行うことが難しくなる。政権が大手メディアを事実上支配下に置いて政権批判を抑え込んでいけば健全な野党は育たず、プーチン以外の選択肢はいつまでたつても現れない。ロシア国民はいずれ、それが国にとって真の利益なのかを自らに問わなければならなくなる。

プーチンの感覚は一般のロシア人とはやや違っている。二〇一〇年九月に視察先の極東・沿海地方でクジラ撃ちをした時、波が高く雨も降る中に小さなゴムボートでクジラを追い、記者団から「危ないとは思わなかったのか」と聞かれたプーチンは「人生には危険がつきものだ」と答えた。政治的には保守だが、ハンググライダーに乗ったり世界最深のバイカル湖に潜水艇

で潜ったりと、およそ大国の大統領なら周囲が許さないようなことをやっていたがプーチンには自分が熱中できることならリスクを顧みずに挑戦する傾向がある。ウクライナ危機でも、彼以外のロシア大統領なら絶対に避けたであろうクリミア編入という危険な橋をあえて渡った。米国という最強の相手に対抗するプーチンは、これからも国際政治の舞台で目が離せない存在であり続けるに違いない。

ウクライナ危機はロシアや米国だけでなく、日本にもさまざまな課題を突きつけている。その一つが「国家の独立とは何か」という問いだ。ソ連崩壊という混乱の中でウクライナが「棚ぼた」式に手にした独立は真の独立ではなく、エネルギー資源や安全保障をロシアに依存し続ける、形だけの独立だった。国内は親欧米派と親ロシア派に分裂して対立を続け、キエフでの流血の政変をきっかけにロシアの介入を招いた。ロシアの軍事基地が存在したクリミア半島はあつさりロシアに編入され、東部では独立を求める親ロシア派と政府軍の紛争が続いている。

ロシアとの間に北方領土問題を抱える日本の安倍政権は対口関係を悪化させたくないと思いつながら欧米と歩調を合わせて対口制裁に加わり、ロシアの反発を招いた。国連安全保障理事会の常任理事国入りを悲願とする日本の姿勢について「安保理を拡大する場合は、他国に依存する国ではなく独立した国でなければならない」というロシア側の指摘は重大な意味を持つてい



る。日本ではとかく日米関係の優先を当然と考えがちだが、「米国追従の日本は真の独立国といえるのか」「何が日本にとつての国益なのか」という問い掛けは、米国の圧倒的な地位が低下し中国が台頭するなど、国際秩序が大きく変化する中、再考に値する。

前著『ブーチンの思考』（二〇一二年）ではブーチンという人は何者なのか、何を目指しているのかについて考察した。本書はその後に起きたロシアの電撃的なクリミア半島編入を軸に、「戦後七〇年」の世界の大きな変動と、その中で「ブーチンのロシア」が果たした役割についてまとめたものである。その意味で本書は『ブーチンの思考』の続編であり、前著と合わせてお読みいただければ、ブーチンと現代ロシアについての理解がさらに深まると思う。

本書の出版に当たっては岩波書店の小田野耕明さんと柿原寛さん、同社新書編集部の方安田衛さんに大変お世話になった。深く感謝したい。

二〇一六年二月 東京にて

佐藤親賢